重み噛みしめ　翔け

山城15回　段本幸男

京都三中、山城高校、創立百年を、心からお慶び申し上げます。一言で百年といいますが、これは大変『重い歴史』と捕らえらるべきなのだろうと思います。私が、山城高校に通っていたのは今から三十五年ほど前、昭和三十六～三十八年で、『六十年安保の余韻が残る（全学連が全盛の）』また『西大路通りにも市電が走っていた』そんな時代でした。今から見れば隔世の感のある時代です。三分の一世紀ですらそうなのですから、百年という歴史の重みは推して知るべしでしょう。

今、日本社会は大きな転換期を迎えています。二十世紀、人口が年平均百万人増加し、経済が右肩上がり一方で成長する時代から、二十一世紀は、今後五十年間平均で八万人減少し、経済も低成長で推移することが予想されている時代。当然、社会の仕組みも、大きな変更を余儀なくされていると考えなくてはなりません。小泉総理はこれを、『改革なくして成長なし』とか『官から民へ、中央から地方へ』という言葉で、時代変化していかなければならないと説きました。私も全く同感です。

ただその時に大切なことは、「キチンと前時代を総括し、そ

の上に立って次の時代の組み立てが出来ているかどうか」です。国会で、様々な改革議論に加わらせてもらいましたが、その都度、元の制度を守ろうとする人たちの葛藤がありました。『年金』などは、それがもっとも顕著に出た事例だと思います。『変革』というのはいつの時代もつらいもの。これをどれだけ多くの人の議論でこれを乗り越えていくか、そこが大切なのです。

このような時代に、百年の歴史を持つ『京都三中・山城高校同窓会』は、活動次第で大変貴重な存在、ということが出来ます。すなわち、百年間にわたる幾層にも積み上がった年代の人を会員に持つ同窓会は、時代転換をチェックするのに『一番ふさわしい組織』だからです。

『少子高齢化』が今後もさらに進行する我が国社会で、引き続き活力を保っていくためには、少ない人間で如何に助け合うか、各年代間での『協働』が非常に重要になってきます。同窓会組織が、『協働』、『共助』といった二十一世紀に求められる新しい社会活動を担う役割を求められているのです。またそうすることが、これまで以上の味わいのある人の交流、人の輪へと広がっていくものと思われます。

『京都三中・山城高校同窓会』が、百年を契機に、これまで以上に助け合いの心を持った、また新時代の社会貢献できる組織として、大きく翔いて行くことを期待したいと思います。